

ウイズビーチの仲間たち

(七月二十二日、日)

午前九時に起床。

十時にホテルから出ると、外は少々の雨模様であった。

雨具の持参は無いのだが、大した雨ではないので、直ぐに上がるだろうと、しばし様子を見る。

午後の二時には、ウイズビーチキャンプ場に向かうバスに乗るのに、お昼頃までには出発地のインターナショナル・スチューデント・ハウスまで向かわなければならぬのだが、ここでもまた、同スチューデント・ハウスの住所連絡先等の詳細情報の記載されていたプリントが見つからないという緊急事態が発生した。

日本からの出発時に忘れて来たのか、或いは、リュックの中の何処かに隠れているのか、なかなか見当たらないので、サポートの代理店に連絡を入れても連絡付かずのトラブルだった。

仕方がないので、公衆電話の電話帳でインターナショナル・スチューデント・ハウスを探しての住所確認となったが、ともあれ、所在の確認が出来たので、そこ迄をバスで移動して、出発集合場所には無事に辿り着くことが出来た。(他人には絶対に勧められない様な無謀なリスクだったには違いないだろう)

ともあれ、バスは午後二時過ぎに出発し、北方約一七〇キロのウイズビーチ・キャンプ場に到着したのは午後五時半過ぎだった。

キャンプに着くと、暫くのあと、ダイニングルーム兼大広間でのガイダンスがあった。

多分、エジプト系辺りだろうかと思われるアフロヘアのトムと云う人とアシスタントでの延々と一時間半位に及んでのガイダンスがあった。

日常での会話程度ならまだしも、延々とした説明会となると、日本語であったとしても全ては頭には入らないかも知れないのに、それがオール英語なのだから、集中力の続かない身としては、果たして、どれ程に理解が及んだものかどうか。😓

もちろん、短縮してくれないだろうかとは思ったものだった。

今日から参加の約二十名位を含めた全体での参加者数と云うのは、概ね、四十人くらいの様だが、女性の参加者数はと云うと、その三分の一弱くらいだろうか。やや寂しい様な気がしないでもない様な…。

参加国については、ほぼ欧州全域の各国からと、米国、カナダからの各一人と、日本からでは私を含めた男性六人であった。

宿舎の方は、やはり、農場のキャンプ場なのだから、余り期待しても仕方ない処だろうが、男性用の方での外観は、かまぼこ形の様なブリキ波板屋根が四棟あり、室内は只、地面の床に一室八台の簡易ベッドが置かれているだけの部屋だった。

まあ、三食付きと、プラム収穫等の農作業に参加した日には約五千円相当位のお給金付きで、雨露は防げるのだから贅沢を云う程のことでもないだろう。

我が部屋の入居者は私を含めた日本人の六名とアメリカ人ラリーの七名であった。

先ず最初に、室内の適当な空ベッドにそれぞれが落ち着くと一人づつでの自己紹介をした。今回のキャンプでは日本人は、多分にポルトガルに次いで二番目位の多さだろうかとは感じたものだった。

女性用の方は、別棟の平屋根タイプ建物だった。

（七月二十三日、月）

当キャンプでの本番初日ではあったが、今日の農作業には長靴が必要とのことであり、持っていないので作業への参加は見送ることにした。

そもそも、こんな今日の作業のために、わざわざ日本からゴム長靴なんて持って来る訳ないだろう！と、内心思ったものだった。

当然ながら、今日の作業参加者と云うのは少なかつた様だった。

朝は七時少し前には起床したのだが、作業には不参加となったので、朝食の後には再びベッドの寝袋の中に潜り込んだ。

到着来の、まだ、環境にも慣れない初日であり、作業に参加しないととなると、何もやることが無いのだ。

一日が長いと云うか、何しろ、夜には二十一時を過ぎないと日が沈まないのだから、日本よりは遥かに一日が長いと云う印象でもある。

寝ては起き、起きては、また寝て…の繰返ししかない様なものだが、昼食の後には、また、ベッドにと潜り込む…。

要するに、養老院の施設にでも入った様なものだなとの自覚ではあったのだが、午後の夕方近くになると、隣棟のポルトガル人メンバーとの意気投合があった。

アレクサンドルが、我が棟メンバーに対して、

「これは、私の祖父の代から作られている貴重なポートワインです。良かったらどうぞ」と云って、差入れと挨拶にやって来てからのことだった。

早速に、一口づつを味わった後に、皆で近くのパブ（大衆酒場）に行こうと云う話になり、さらに親交が深まったものだった。

（七月二十四日、火）

午前六時五〇分、起床。

午前中だけでも何とかスッキリと晴れ上がったのは一八日のロンドン到着以来、初めての好天気だった。

今日こそは農場の作業にも参加したいとは思っていたのだが、残念ながら、朝のトラックには乗りそびれてしまった。

仕方ないので、退屈しのぎにと思い、ウィズビーチの町の観光に出てみることにした。そして、町の小さな楽器店に入り、そこで知り合ったのがフランススカ・マリアと云う現地女性であった。

「くんごちは。何かお探しますか？」

「いえ、私は一昨日から、この直ぐ近くのキャンプ場に来ているものです。日本から来していますね」

「へっ、そうなの？ 私はフランススカ・マリアと云います。このお店ではアルバイトで仕事をしていて、近くに住んでいます」

「私は、サトルと云います。今日は農場の作業に参加しようと思っただんですが、朝のトラックに乗り遅れてしまったので、こうして町の散策に出掛けて来た処です」

「そうですか。では、ごゆるりしてください。私は、大学では美術を専攻しているんですが、将来は学校での美術教師になって、子供たちに美術を教えたいと思ってるの」「へっ。そうなんですか。どんな絵を描かれるのか、出来たら見たいものですね」

「明日は暇があるから、イイですよ。午前中に、また来たら見せてあげます」

「そうですか。それはうれしいなあ。じゃあ、また明日に來ますよ」

「あなたはイギリスに来てから、イギリスのアイスは食べたことある？」

「いえ、無いです」

「そうですか。じゃあ、待ってください」

と云って、わざわざ近くの店まで行き、アイスクリームを買って来て、こ馳走してくれた。

「フ~~~~っ。ありがとうございます」

「何と云う親切で優しい女性なんだろう。。。❤️ 何も買ってくねそうにもない、沢介の通り掛かりに過ぎない私に…と、内心では涙が出そうな程の感激であり、嬉しかった。ありがとう❤�」

近くの公園で、彼女の写真を撮ってから別れた。

夜には、キャンプの広間では「一四十二年の夏」と云う映画の上映があったので鑑賞していたのだが、後半では眠気が差してきたので部屋に戻ってベッドに入った。

（ 七月二十五日、水 ）

七時一〇分に起床。

今日は仕事の割り当てがあったので、そちらの方に出ているわは、五千円位相当の田当にはなったのだが、午前中に昨日の楽器店に行ってマリアの作品を見せて貰うという約束があったので、日当の方は捨てて、お店への再訪を優先とした。

十一時頃にはキャンプを出て、少し歩いてから車を拾って町中へ。そして、店に着いた。

「やあ、こんちは。昨日はどうもありがとう。ほんっとに美味しかったよ、昨日のアイスは…」

「いえいえ、どう致しまして。あなたに約束していた私の作品を幾つか持って来たわ。数点の絵画作品をテーブルの上に広げて見せてくれた。

やはり、美術教師を目指していると云うだけあって、素晴らしいものばかりだった。

ビールとレモンのミックスされたものだというビールの様な飲み物を差し出してくれた。アルコールには弱いのだが、確かに、口当たりは良かった。

十一時半にはお店を閉めるということで長居は出来なかったのだが、帰りには女店主の車で、帰路の序でもあったのだが、キャンプまでは送ってくれた。

もう少し、早めに着くように行けば、もっとゆっくりにした話も出来て良かっただろうがとは思ったものだった。

作業に参加しなかった日には日中での何もすることが無いのだが、余りに早めに戻って来てしまい、仕方がないので、また、ベッドに入る以外にはない。午後四時頃までの昼寝とした。

夕方にはフィンランド人のニーナとウーラの二人と一緒に写真を撮ったり、持参のハミリフィルムカメラで撮影したりした。

夜の七時半からの一時間は英会話教室が有ったので参加した。

（ 七月二十六日、木 ）

今朝方に見ていた夢は、生まれて初めての英語内容での夢だった。

今日は仕事での割り当てが無かったので、何もやる事が無い暇な一日となった。日中にはポルトガル人グループとのサッカーの草試合をやることになった。

サッカーの試合とは云っても、まともなコートやゴールの設備がある訳でもないのだが、簡易な広場サッカーと云った様なものである。

只、草試合ではあるけれども、一応は国際試合になるだけに、安易に負けるという訳にも行かないのだが、大いに盛り上がった。

正確な点数と勝敗については無記録に付き不明だったが、久し振りでの良い汗をかいた様な運動だったので、それなりに疲れたものだった。

夕食の後には、広間のテーブルでニーナと話をしながら、日本語を教えたりもしていた処に、ラリーが割り込んで来たので三人となった。

「ねえ、私はエンペラーの歌が聴きたいわ。一曲だけでもイヤから歌ってよ」

「エッ。そんなあ、無理だよお。歌詞カードもないし、マイクもステージもない。それに、バックグラウンドの伴奏もないんだから無理だよ。そんな気分にはなれないよ。」

「そっこだよ、エンペラー。一曲でもイヤんだからさあ、歌ってよ」

「ニーナの要請に加えて、ラリーまでもが煽って来た。

「ねえ、お願いだから、一曲だけでいいから歌ってよ。お願い…」

再度、ニーナが執拗に迫って来た。

カラオケでもあるならまだしも、この時代には、そういう設備が無いだけでなく、何も無いのだから、そんな気分にはなれる訳もない。。。😞 まあ、ラリーからの要請だけならどうでも良いことだが、ニーナからの上目遣いで「ソツとされたのには弱い。。。💧」

五十年後の我が末娘が何かをねだる時と、ほぼ同一種の一瞬の表情である。😞

「仕方ないなあ。じゃあ、ちよつとだけだぞ〜。マイクもアンプ・スピーカーも何も無いから気分も乗らないんだけど。。。じゃあ、ギターは持っているつもりで。。。」

と云うことで、仕方なく、ポプティランの「風に吹かれて」の一曲を、エア・ギターを抱えての披露となる。

今となつては、只、ひと時の笑い話みたいなものであった。

歌のことは、多分、ミーティングが集まりグループの場での自己紹介の時に趣味として口が滑っていたからのことだろう。

金髪のニーナは何処となく上品かつ清楚な印象であり、知的そうな雰囲気もあり、可愛らしい。(せつかく、親しくなれたのに、今度の日曜日にはキャンプを退散になると云うのだから、残念な気もするのだが。。。)

夜には初めての卓球試合をやったので少し参加した。結果は一戦一勝だった。

こういふ時には、ついつい本気になってしまうものだ。国際試合になるとの意識を持つと尚更である。



（ 七月二十七日、金 ）

今日は全員にとつての仕事自体が無かったので、朝食は九時からだった。

何処かに行くと言つててもなく、やることも無いので、日本の友人たちへの絵葉書を書いたりして出しておいた。

日中での何もやる事が無い日には、何しろ、日の出から日没までの一日が日本の東京辺りよりは四、五時間くらい長い様なので時間を過ごすのも大変と云えば、大変だとも言えるだろう。

昨日には、余りに久しぶりでのサッカーの運動では本気を出していたので、身体のうちちに筋肉痛があるようだ。

夜の十時からは広間でのダンスパーティーがあり、初参加した。

否、ダンスパーティーと云うよりは、むしろ、ディスコパーティーと云つた方が的を得ているだろうが、二十カ国近くからの若者たちが四十人位も集まつてるのだから、それは、大変な盛り上がりがある。

曲の方は、日本ではまだ名前も曲も聞いたことが無かつたのだが、どうやら、現地イギリスでは、爆発的売出中の、ディー・パープルの曲が連続的に流されていた。

LP版なので他の曲も何曲かが流されてはいるのだが、中でも、「スモーク・オン・ザ・ウォーター」という曲がとりわけ、強力なインパクトであった。

毎日のランチタイムと夕食団欒のひと時にも流されていた曲ではあるのだが、また、この薄暗い照明のディスコタイムの時には強烈な音量で繰り返し再生されていたので、室内では若者たちのほとぼはしる様な熱気で溢れ返っていたものだった。

只、パーティーでの残念な処と云えば、全体での女性人数が少ないというアンバランスな問題があった。結果、女性が引つ張りだこになってしまうと云う、男性陣にとっては、少ない女性を如何に自分や自分たちのグループに誘い入れるかと云う難儀な事情でもあった。

一部には、素早く一対一でのペアになり、部屋の片隅の薄暗い所に座り込んで、すつかり出来上がつてる様な、何組かのにわかカップルも居たが、我が部屋男子グループに参加してくれたのは、マリーとイレーヌとニーナとウーラとマリア、或いはたまには、他に一人か二人の女性が入つてくれたくらいがやっとの様なものだった。

まあ、人数の比率からしたら悪くもないのかも知れないだろう。

今日のニーナは何となくの陰りがある様な、元気が無い様な印象だった。

それでも、何度かはグループ内にも入つて来てくれたので良かったとは思うのだが、ニーナとウーラは明後日の日曜日には他の約半数くらいの面々と共に、このキャンプを去っていくのだから、多分に、それでの寂しさの様なものは有つたのだろうか……。

（ 七月二十八日、土 ）

今日は朝から、オプシヨン参加でのノーウィッチへのバスハイクの企画があつたのだ

が、前夜のパーティーでの夜更かしによる寝坊で、バスの出発に乗り遅れての不参加となっていました。😓

パーティーの方は、いつまでもなかなか終わらなかったもので、我が部屋グループは午前一時過ぎ辺りで切上げ退散したのだが、その後も、延々と午前二時過ぎ辺りまで続いていたようだった。

バスハイクも、当時には、別に、それ程の参加意欲があった程でもなかったもので、「まあ、いいや」とは思っていたものの、後になってみると、やはり、貴重な機会を逃してしまった様な気がしては後悔したものだ。😓

（七月二十九日、日）

キャンプでの一週間を過ごした日曜日の前には、ここで二週間を過ごした約半数メンバーの退場があり、我々居残り組総出での見送り会があった。

最後の別れ際にバスに乗る際には、全員の一人一人が握手の手を差し出して来たのを固く握り返したものだ。

私は、ハミリフィルムを回していたので気付くのが遅れたのだが、ニーナとウーラがバスに乗ろうとする寸前に私の手を取って握手を求めて来たのには少しの驚きの気持ちもあったが、心から温かくなる様な、嬉しい思いがしたものだ。

共通の期間は一週間と云う短い期間だったが、毎日の食事会や週二回か三回のダンスパーティーをも含めた、ほぼ一日の大半の時間を共にして顔を合わせていたのだから、経過した期間以上に、それなりに密度が濃かった様には思えるのだ。

バスに乗る時には、特に、女子の中には泣いていたり、顔を伏せて泣きそうな顔の子たちが多かった。

人生は、出会いと別れの繰り返しであり、実質、これが今生の別れと云うことになるのだから、一抹の寂しさがあるのは否めないだろう。

（同日の午後）

「へー!!! ラリー!!!」

「オ、何だい? エンペラー」

「今日は何の日か知ってるかな?」

「エッ!!! 何? 何かあったかな?」

「何だ、知らないのかい?」

「知らないけど、何かあったかなあ」

「教えて欲しい?」

「ああ。何だい? 早く教えてよ!!!」

「そっかい。じゃあ、仕方ないなあ、教えるか。実は、今日はオレのバースデイなんだよ。何かないただろうかい?」

「オッ!! そうかい。 そりゃあ、おめでとう!! じゃあ、ちょっと、いっしょに来いよ。」
と、広間のダイニングへと私を誘ったので付いて行く。

「お〜い、みんな!! 今日はいンペラーのバースデイなんだぞ。 誕生日をやるうぜ
!!」

と、居合わせた女性陣や周囲にも声を掛けて誘い入れてくれた。

早速、有り合せのバスケットや茶菓子類と飲料などをかき集めて、私を囲んでの
“ハッピーバースデイ”を歌い、細やかな誕生日会なるものを開いてくれた。

「やあ、皆さん、今日は私のために、わざわざお集まり頂いてありがとうございます。
いやあ、別に、催促した訳じゃあないんだけどなあ…。 ラリーが…」
とか何とかの簡単な挨拶をする。

ともあれ、しばしの歓談の場を設ける口実としては良い機会にはなった様なものだった。
た。

「今日のこの後には、二〇人くらいの子グループが到着するらしいヨ」
と、誰かが云った。

「フ〜オ!! そりゃあ、凄いなあ!!」
と、誰かが反応した。

一瞬のザワ付きと、他の男子の面々にも、思わずニヤけた顔色が出ていた様だが、一
方の女性陣の間には一瞬の冷ややかな空気が流れた様な気がした。

結局、第一陣で到着したバスでは大半が女子で、男性は三、四人だったようだ。
第二陣の到着では男性の方が多かった様だった。

結果的には、全体での男女比率が七対三くらいだったのが、六対四くらいか半々近
くにはなったのかも知れない。

何れにしても、夏休みの若者達にとっては、日本人の発想からでは到底、出て来な
い様な、楽しくて魅力的な企画内容とアイデアが盛り沢山なキャンプであり、合理的
な農場運営システムなどは、つくづく感心させられたものだった。

今の私が、もし、それなりに大規模の農場経営者だとしたら、繁忙期が夏休みと重
なるのでさえあれば、是非、取り入れてみたいようなシステムだなとは思ったものだっ
た。 日本の置かれている環境からでは、なかなか、欧州の様に、二〇カ国くらいからの
学生が容易に集まると云う同様には行かないだろうが…。

毎日の、農場から帰って来てから夕食までの一段落の時間帯では、他の意味での盛
り上がりも云うのもあった。

今回での個別参加者としては、おそろしく、一番多かっただろうかと思える、隣棟の
ポルトガル人男性のグループ(多分、六、七人くらい)なのだが、足元付近の砂利を手

に取っては、我がグループのブリキ屋根にバラバラと投げつけるので、「コラ〜!!」と、部屋の皆でそれを追い廻して騒ぐと云う、日本の遊びに例えれば鬼ごっこか雪合戦の様な戯れと云った様な処だろうか。

多分に、ポルトガル人グループにおいては十代の高校生だったろうかとは思うので、我々のグループにも構って欲しい、一緒に遊びたいという様なモーションではあったのだろうが、ほぼ、日々の日課の様なものではあった。

私への「エンペラー」とのあだ名を付けて呼び始めたのも、理由は不明ながらも、彼らの中からの始まりで、それが直ぐに周囲にも広がって、皆からは親しみを込めてそう呼ばれていた様なものだった。

（ 七月三十日、月 ）

午前中は、やはり、これ迄同様にどんよりした曇り空で、長袖シャツ一枚では肌寒い様な天気だったのだが、午後には急速に回復して、久し振りに……と云うよりは、英国到着以来での青空を見ることが出来た様なものだった。

空が晴れて来ると、やはり、真夏の強い日差しであり、暑くなって来たので、早速、長袖から半袖シャツに着替えたものだが、それでも、まだ汗ばむような暑さとなった。

午後には、久し振りに風呂に入り、シャツやスラックスの洗濯をやる。

夜にはまた、十時頃からのダンスパーティーがあるのだが、それにしても、私自身も含めて、やはり日本人仲間と云うのは全般的に大人しいと云うか、こういうった場面でも、どちからかと云うと消極的であり、欧米人の様には盛り上がり難いと云う傾向ではある様だ。

（ 七月三十一日、火 ）

初めての英国に到着して以来の朝から晴天らしい晴天となった。

日中の気温にしても、昨日の午前と比べればいきなり、十度くらいは気温も上がったことだろうか。

今日こそは仕事に参加しようとの思いではあったのだが、なかなか朝の目覚めが良くなかった。

洗顔もしないままに朝食を摂り、農場行のトラックに乗ろうとはしたのだが、マネージャーのトムから「今日は、もう遅いので明日にしてください」と云われて、トラックには乗せてもらえなかった。

仕方がなく予定が空いたので、午前中は昼寝に充てて、午後には、日本の知人、友人、身内等への手紙を書いて出したり、居残り組との歓談で過ごす。

夜の九時半からは、ダイニング広間での十六ミリフィルムの「ロード・オブ・ザ・フライズ」と云う古いモノクロ映画の上映があった。

（八月一日、水）

今日こそは、仕事にも一回くらいは参加しようとは思っていたのだが、農場行のトラックがいつもよりは早めに出てしまったので参加が出来なかった。多分に、予定人数が早めに埋まってしまったことで早めに出発してしまったのだろう。昨日来の暑い一日ではあったが、クワイエット・ルームでは絵を描いたり日記を付けたり、居残り組との談笑で過ぎます。

（八月二日、木）

今日は、予め、掲示板には仕事の割り振りがしてあったので、とにかく、せめて一度くらいは体験しておかねばと云う気持ちも有り、少なからず張り切っていたのだが、無事に参加出来たの一日を終えた。

今日の仕事内容は、リンゴの木の新芽折りだった。

参加の皆でのワイワイ、キャーキャー言いながらの農作業と云うのは、左程の苦になる様な作業ではなく、むしろ、結構楽しくて、良い経験にもなったものだった。

時に、作業から帰って来てからの同部屋のラリーの話では、明日朝にはキャンプを出て、ピッチハイクでスコットランド・エンジンバラへ向かうと云う話だった。

夕食の後なので、腹が減ってる訳もないのだが、相部屋仲間の皆で、街のチャイニーズレストランでの送別会をやるうと云うことになり、出かけた。

また、その後、一旦は戻って来てから、再び、今度はいつものパブでの二次会に行こうと云う話になり、出掛けたものだった。

（八月三日、金）

朝早々にラリーが発つ時には、相部屋の我々と一緒に写真を撮ったり、仲間の一人一人との軽いハグと握手を交わして旅立ち、その後姿を見送った。

同部屋のベッドが一つ、歯が抜けたように空いたのは、これが今生の別れでもあり、寂しい気がしたものだ。

期間としては、只の一週間のことであり、年月の単位と云う程のことではないのだが、朝から晩までの殆ど一日中を狭い同部屋とエリア内での顔合わせの中で過ごしていたのだから、正に家族の様な親近感になっていたことだろう。

仮に、月に一度くらいの顔合わせでの五年、十年と云うのよりは、遥かに感覚も深まっていたものだろう。

その日の私の日記には、珍しく英文での記載が残っていた。

「人生は長くて偉大なドラマである。実に多くの様々な人との出逢いと別れの繰り返しがあるが、然しながら、それら出逢いの機会遭遇する人々と云うのは人世の中での、いく／＼一部の限られた人達なのである」との趣旨内容だった。

つまりは、「袖触れ合うも多少の縁」を英文にしていただけのことだが、その時の心情としての記録だったようだった。

何れにしても、私にしても明後日の日曜日には出立するのであるが、明日には同部屋の千村君もエジンバラへ向けて出立すると云うので、さらに、今夜も我々相部屋仲間での送別会と云うことになり、いつものパブに向かうことにした。

(八月四日、土)

午前の十時半頃には千村君がキャンプを去って行った。

さらに、部屋のベッドが空いたので、室内の空間にはさらに侘しい様な空気が流れたものだった。

私自身においても、この日の朝か、或いは明日に出立する旨、周囲には伝えてあったことなのだが、一方では、やはり、後ろ髪が引かれる様な心境でもあったので、今夜のダンスパーティーには参加してみようかと云う気にもなり、もう一晩止まることにした。

厚間には、クワイエットルームでママリと一緒にいた時に、

「私の似顔絵を描いてよ」

と云われたので、それなりに頑張って描いてあげたところ、イレーヌからも

「私にも書いてよ」

と云われた。

「じゃあ、何処か他の場所に行こうか？」

と、敷地に隣接する土手の原っぱへと促し、彼女の似顔絵描きにトライしてはみたものだが、なんせ、普段からの絵心がある訳でもない。そもそも、これ迄の人生においても他人様の顔を、ましてや、うら若い女性の顔を至近距離からマスマジと眺めながらの似顔絵なんて、唯の一度も描いたことなど無いのであり、おそろくは、今後も無いだろう。

只、目や、鼻の下が長くなりながら描いていた様なもののだが、或いは、數医者が、内心ではオロオロ、ワクワクしながらも、婦人患者さんの身体に聴診器を当てながら体裁を繕っている様なものだったかも知れない。

或いは、なかなか思う様に上手く描き難いのは、そもそもその邪心が禍していた側面も否定は出来ない様な処だろう。

何れにしても、女性の顔をそなたにメールも無きような至近距離からマスマジと見詰めれる様な機会なんて云うのは、せいぜいせいぜい有る位ではないだろうし、今後の人生を通して無いくじだろう。

ともあれ、提供物に喜んではくれたのだから、結果、オーライと云うことにしよう。

「今日は天気が良くて気持ちがいーやね」

「そうよね。エンペラーは来週ここを出たらどうするの?」

「うん。予定や予約と云うのは全然ないけど、ここを出たら、先ずは、ヒッチハイクでイギリスを一周して、その後は、フランスに渡ったらオランダやドイツとか北欧の方かな。オランダの阿姆斯特ダムには、日本人の友達のお兄さんが働いている大きなホテルがあるけど、そのお兄さんの所にも立ち寄ってみようとは思ってる。そして、北欧の方を一巡して、南下して戻って来た後には南の方かな」

「フーオ。いいわねえ。私も、そんな旅行がしてみたいよ。一緒に連れてってよ。(笑)」

「それは、いいなあ。(笑) 日本の古い言葉には『タビハミチヅレヨハナサケ』って云うのがあるんだよ。」

「エッ? 何?」

「タビハ・ミチヅレ・ヨハ・ナサケ」

「タビハ・ミチユレ・ヨハ・・・? っていう意味?」

「“タビ”と云うのは『旅行』のことだよ。“ミチユレ”ではなくて、“ミチヅレ”だけど、これは、『一緒に』と云う意味。“ヨハ”は『世の中』のこと。“ナサケ”と云うのは『思いやり』、人に対しての『優しさ』とか、そういう意味だね。だから、旅行は一人でよりは話し相手のパートナーが居た方がより楽しいし、例えば、美しい景色も一人で眺めるよりは二人で楽しめれば一倍に美しく見えるかも知れないよね。世の中だっつて、お互いに相手を思いやる優しさの気持ちが大事だよね。だから、そういう意味なんだよ。」

「へっ。素敵な言葉なんだね。(笑)」

「君はこのキャンプが終わった後にはどうするのかな?」

「私は、ポーランドに帰ったら、九月からは大学が始まるわ」

「そうか。。。このウイズビーチのキャンプが学生時代での良い思い出だね」

「ええ。本当に楽しかったわ。それに、貴方とも、こういう話が出来たりして」

「いっ。俺だって、本当に良い思い出になったとは思ってるよ。君と、こういうこのんびり話が出来ただけでも良い思い出だよ」

「ねえ、サトルー」

「何?」

「貴方にとっては、国際結婚と云うのは出来るの?」

「エッ? ケ・ケ・ッ・コ・ン…」

彼女の発した突然のひと言は、その時の彼女の雰囲気や穏やかな優しい表情とともに記憶の奥深くに突き刺さるやうに残ったものだった。

真剣そうな、好意的な気配と云うのは感じないものではなかったのだが・・・。

只、正直な処では、その“結婚”という二字については、まだ、日本女性との交際経

験さえなかった様な未熟な身でもあり、また、一方での自分の生活さえままならないという現実があり、で、予期しなかった突然の問い掛けには、一瞬、返す言葉に詰まってしまったものだった。

後になっての、冷静に考えた上での応答としてならば、

「恋愛に国境なんて関係ないよ」

とでもカッ「良く応じていた方が、それはそれで良かったのかも知れない。

或いは、もしかしたら、何某かの良い方向への進展の可能性を残したのかも知れないだろうが、後々にも、少々尾を引いてしまった様なものではあった。

只、如何せん、時間が足りな過ぎたのは否めないのだが、赤茶髪で二十歳のポーランド人女性イレーヌとの暫しのマッタリした時間のひと時ではあった。

多分に、ヨーロッパの中でもポーランドやフィンランドと云うのは昔からの親田国と言われている様な国でもあるので、それ故に、日本か或いは、日本人への憧れの様なものがあつての、日本人である私への関心と云うのがそれなりには有つたのかも知れないだろうが。

何れにしろ、人生上では、ホンの一瞬のポタンの掛け違えや、或いは、瞬間のひとで、その後の流れと云うのが大きく変わってしまう可能性と云うのは、時にはあることだろう。

また、その時々での判断や選択と云うのが、果たして最良だったのかどうかという点についても、その時点では不明な場合が少なくないであろうし、最終的には、人生の終わりが近づいた頃に至って初めて、漸く理解の及ぶ処なのかも知れない。

所詮、人は不完全なので、しばしば、判断の過ちを言すものなのだから。

夜のダンスパーティーでは、正直な処、余り、そんな気分には乗れないで居たものだが、イレーヌからの手の差し出しがあつたので、それに同調して誘いに乗れたのが、せ



めてもの、最後の気慰みみたいなものだったろうか。

（八月五日、日）

二週間のキャンプ場生活が終わったので朝食の後には出立を予定していたのだが、前夜遅くまでのパーティーからの寝不足で朝の目覚めはなかなか辛いものだった。

午前中には、同キャンプを退所するメンバーの迎えのバスが到着するのだが、私は、その前にヒッチハイクで旅立つことにしたので、皆からの盛大な（?!）見送りの声援を背に受けながらの出立となった。

一人一人との握手を交わしながらの別れ際、固く手を握り返して来たイレーヌの手の温もりと、物悲しそうな憂いの眼差しは、前日の話の続きか何かを語り掛けている様な気配を感じたものだった。